倭の 30 国

大川 直士

1. 緒言

邪馬台国時代の研究には、考古学によるアプローチと文献からのアプローチが必用である。戦後の土地開発に伴う遺跡発掘の増加によって多くの考古学上の知見が得られ、邪馬台国は朧気ながら見えるようになってきている。一方、文献の研究はやり尽くされた感があり、最近では新たな解釈を耳にすること殆どはない。そこで、筆者は後漢書東夷伝倭の条（後漢書倭伝）と魏史東夷伝倭人の条（魏志倭人伝）の読み直し、前報の邪馬台国の実像[1)]で、「後漢および魏の時代は奴国以北が倭国であり、それ以外は倭であったこと」、「大乱によって 100 余りの国が 30 国に統合されたのではなく、楽浪郡と交流していた 30 の王国が 3 王国と 27 の王がいない国になったこと」、「邪馬台国を含む 30 国は九州にあったこと」、「邪馬台国は朝倉市甘木にあり、投馬国は玉名市にあったこと」、「大倭は邪馬台国のことであり、一大率は魏の地方長官であったこと」を示した。この論文で筆者は、倭の 30 国の国名の由来と場所、邪馬台国との関係を明らかにする。

2　地名の起源

2－1 古事記に認められるアイヌ語地名

倭種が渡ってきた時、日本列島には先住民族の縄文人が暮らしていた。倭種は Y 染色体ハプログループ O1b 系統である。この系統の言語はオーストロネシア語族であるが、日本語はそれとは違う。それは、日本に渡ってきた倭種が少数であったためであり、日本語の祖型は縄文人の言葉であると考えられる[2)]。縄文人はアイヌに極めて近い人種であるので、古代から続く地名はアイヌ語に由来する可能性が高い。大友幸男[3)]も、アイヌ語地名は日本全国に存在していることを指摘している。

古事記によれば、九州には筑紫国、肥国、豊国および熊曽国があった。筑紫国は現在の福岡県西部であり、現在でも九州最大の筑後川の流域が筑紫平野と呼ばれている。筑紫の地名は、北海道浜頓別町に筑紫川として存在する。この川の名称は、アイヌ語の[chip-kus-nay]（船・航行する・川）に由来するとされる。縄文人は筑後川を船で渡っていたに違いない。従って、九州の筑紫もアイヌ語の[chip-kus]に由来すると考えられる。

縄文時代は地球全体が暖かくなり、日本付近の海面は現在よりも高くなって海が陸に入り込んだ。これを縄文海進という。今から 6000 年前の最盛期には、福岡県北部では海が大きく陸に入り込み、いくつもの内湾ができた。遠賀川流域では、直方市まで海が入り込んでおり、中間市、鞍手町、水巻町、遠賀町、芦屋町に広がる水田の部分は、当時は海であった。その後、地球が寒冷化すると、海外線は次第に後退し、川が運ぶ土砂によって海は埋め立て

られていった。さらに埋め立てが進行すると、遠賀川流域には沢山の沼や湖が生じた。遠賀川流域は当時日本最大の干潟であり、遠賀の地名は「大きな干潟」であるといわれる。図 1 は、web サービスの Flood maps（http://flood.firetree.net/）を用いて作成した、現在よりも海面が 2m 高かった縄文時代末期～弥生時代の筑豊地方の想定地図である。この地図には枝分かれした湖沼が認められる。アイヌ語で、沼や湖は[to]、枝分かれした支湖沼は[yopi-to]である。アイヌ語地名においては音韻転倒する場合があるので、「豊」は[yopi-to] が転倒した[to-yopi]に由来すると考えられる。

図 1　縄文時代末期の筑豊地方の想定地図
（出典： Flood maps）

熊本県には阿蘇山、長崎県には雲仙岳という活火山があるため、肥国の語源は「火の国」であるとする説がある。しかし、古語では「火」は「ひ」ではなく、「ほ」であった。また、アイヌ語では火は[ape]、または[hoka]である。従って、「肥国」の由来は「火の国」はない。長崎県、佐賀県および熊本県は有明海に面している。有明海は遠浅であり、沿岸は浜である。従って、「肥国」の肥の語源は、アイヌ語で浜を意味する[pis]であると考えられる。

九州は温暖であった。また、先住民族の縄文人は戦いをしない民族であったので、倭種にとって九州は極めて住みやすい土地であったと推察される。このため、倭種は人口爆発して、弥生中期には北部九州の人口の 8 割が倭種になったとされる。中橋孝博[4)]は、北部九州で出土する人骨に縄文人との混血の兆候を認められないので、縄文人は追いやられたか、その遺伝子は渡来人に吸収されたとしている。南九州の弥生遺跡からは縄文人骨によく似た人骨が出土する。また、続日本紀などによれば、熊襲の後に登場する隼人は容姿、風習、言葉を倭人と異にしていた。これらのことは、熊曽・隼人と呼ばれた人々は縄文人の末裔であることを示している。また、西九州にも隼人によく似た人々がいたことが分かっている。倭種との生存競争に敗れた縄文人は南九州や西九州に追いやられたのである。熊曾は日本書紀では熊襲であるが、筑前国風土記では球磨囎唹と表記されることから、その支配地は熊本県の球磨地方（人吉市付近）から霧島山北麓の盆地地帯および宮崎県都城市・鹿児島県曽於郡におよぶ地域にあったと考えられる。

縄文人は焼き畑や狩猟・漁労によって生計を立てていたと言われる。縄文人は、捕らえた魚などを乾燥させて保存食とした。そのため、先が二股になった棒を二本立てて、上に物干し竿を渡し、獲物を懸けて干した。この獲物を干す竿はアイヌ語では[kuma]である。人吉盆地は球磨地方で唯一の平坦地であり、多くの縄文人が居住していて、[kuma]がたくさんあったと推察される。このため、この地域は「クマ」と呼ばれ、後世の人々がこれに球磨の

文字を当てたと考えられる。

アイヌ語の[so]は「岩や石がある」の意味であり、北海道の宗谷は「岩や石が多い海岸」の意味であるといわれる。また、日本各地に存在する「曽根」の地名はアイヌ語地名であり、砂・石を局地的に有するやせ地の意味あるとされる。因みに、アイヌ語の[ne]は強調語であって意味はない。実際、埼玉県八潮市大曽根は、綾瀬川沿いの大きなやせ地であった。埼玉県熊谷市小曽根は、利根川と荒川の中間に位置し、地名の由来は川によって運ばれた砂礫の多い痩せた荒地である。新潟県上越市下曽根、新潟県新発田市曽根、三重県尾鷲市曽根町、大和国曽根、長野県大町市社曽根原、三重県度会郡玉城町小社曽根、岡山市南区曽根、愛知県西尾市針曽根町、徳島県那賀郡那珂町桧曽根などの地名も、岩石の多い痩せた土地の意味であるとされている。特に、火山の山麓は溶岩や火山灰に覆われて痩せており、典型的な「ソ」である。また、アイヌ語の[o]は「～に乗る。ある。」曽於市は霧島連山の高千穂峰の麓に拡がった平野にあるから、典型的な「ソ」であった。従って、「曽於」はアイヌ語の[so-o]（（石がごろごろした所にある）に由来すると考えられる。

四国四県は、伊予、讃岐、土佐および阿波とよばれていた。松山市に湧出する道後温泉は古代から知られていた。温泉はアイヌ語では[yu]であるが、日本語版付録のアイヌ語の発音表記によれば、[u]は日本語の「ウ」とは異なり、[u] よりも若干口の丸めて弱く発音するので、日本語話者には「オ」に聞こえることがある。また、アイヌ語の[i]は「我々の」または「この」の意味である。従って、伊予はアイヌ語の[i-yu]（我々の温泉またはこの温泉）に由来すると考えられる。

香川県の讃岐平野は瀬戸内海に面し、背後は阿讃山地である。アイヌ語で[sa]は「山から見た浜の方」、[nup]は「野原」、[kim]は「山」であるから、讃岐はアイヌ語の[sa-nup-kim]（浜と野原と山）に由来すると考えられる。また、現在の高知市は縄文海進時には海であった。その後、海が後退したことによって、高知平野は湖沼になったと推察される。高知市の背後は山が迫っている。アイヌ語で「山からみた浜」は[sa]、「湖沼」は[to]であるから、土佐は[to-sa]（浜に湖沼がある）に由来すると考えられる。さらに、徳島平野は縄文海進後は湿地帯であったと推察される。アイヌ語で「多い」は[a]、「水」は[wak]であるので、阿波はアイヌ語の[a-wak]（水が多い）に由来すると考えられる。

古事記には、これ以外にも山陰や北陸の地名が登場するが、これらも殆どがアイヌ語によって地名の由来を説明することができる。例えば、縄文海進時、島根半島は２つの島であったので、出雲は[i-tu-mosir]（我々の２つの島）に由来すると考えられる。また、伯伎（伯耆）は「hoka-o-kim」（燃える山）に、因幡は[inau-pa]（イナウの材料のキハダやミズキが自生している所に、越は[kus]（通る）に、佐渡は[sa-do]（浜が２つある）に由来すると考えられる。従って、魏志倭人伝に登場する国名の由来もアイヌ語で説明できると考えられる。

2－2　魏志倭人伝に認められるアイヌ語地名

魏志韓伝によれば、韓には馬韓、辰韓および辰韓（弁辰）の３国があり、弁辰の瀆盧国は

倭と接していた。馬韓には 54 国、辰韓には 12 国、弁辰には 12 国があったが、これらの国名に「韓」の文字が用いられた例はない。魏志東夷伝で国名に「韓」の文字が用いられているのは、倭人の条の狗邪韓国のみである。但し、弁辰の 12 国には「弁辰瀆盧国」「弁辰狗邪国」のように、全て「弁辰」が付けられている。これは、魏史韓伝には辰韓と弁辰の国名がまとめて記載されているので、それらを区別するためであると考えられる。従って、狗邪韓国の「韓」の文字は、この国は倭族の国でありながら三韓と伴に朝鮮半島に存在することを示すものであり、「韓にある狗邪国」の意味であると考えられる。朝鮮半島における倭関連遺跡は、慶尚南道の蔚山市、釜山市、金海市、昌原市、泗川市など、東南部に集中している。この地域の海岸線は緩やかな曲線を描き、弓状になっている。アイヌ語で弓または弓状は[ku]、 陸地は[ya]であるので、狗邪はアイヌ語の[ku-ya]（弓状の海岸線）に由来すると考えられる。

對馬国の名称は、上島と下島の 2 島からなることに由来すると考えられる。しかし、『對馬』は倭種の言葉の音を漢字で表現したものであり、「對」の文字には意味はない。実際、古事記では『津島』と表記されている。大友氏は、対馬の語源は二つを意味するアイヌ語の[tu]と岩礁を意味する[suma]からなる[tu-suma]（双子島の意）」であるとしている（「日本縦断アイヌ語地名散歩」)。しかし、[suma]は岩礁であって、島ではない。アイヌ語では、大きいは[si]、島は[mosiri]であるので、對馬はアイヌ語の[tu-si-mosiri]（2 つの大きな島）に由来すると考えられる。

一大国は一支国の誤記で、壱岐島にあったと考えられている。壱岐島は殆どを山野で覆われているが、高い山はなく、山地と農地および集落が混在する典型的な里地里山である。アイヌ語で[i]は「我々の」、[kim]（キㇺ）は「生活圏の一部としての低い山。里山。」である。従って、一支はアイヌ語の[i-kim]（我々の里山）に由来すると考えられる。

末廬国は佐賀県唐津市に、伊都国は福岡県糸島市にあったと考えられている。縄文海進時には海が内陸部にまで入り込み、現在の唐津市は入り江であった。従って、末廬国の人たちは入り江の奥の僅かな平地に住んでいたものと推察される。魏志倭人伝にも、末廬国では（人々は）山と海すれすれに住んでいると書かれている。アイヌ語で[mak]は奥、[etu] は岬、[ra]は低い所である。これらのことから、末廬はアイヌ語の[mak-etu-ra]（岬の奥の低い所）に由来すると考えられる。

糸島市は前原市（旧糸島郡前原町）、糸島郡二丈町および糸島郡志摩町が合併して 2009 年 4 月 16 日に成立した。糸島郡は、1896 年の郡制によって合併するまでは怡土郡と志摩郡に分かれていた。今では怡土地区と志摩地区は陸続きであるが、縄文時代晩期には縄文海進のために両地区は海で隔てられていた。その後、寒冷化に伴って海岸線は次第に後退し、川が運ぶ土砂によって砂丘が生成し、砂丘の内側には湖沼が生じた。図 2 は flood maps（http://flood.firetree.net/）を用いて海面が現在よりも 2m 高かった縄文時代末期～弥生時代の糸島の想定地図である。アイヌ語で、[i]は「我々の」、”to”は「湖沼」の意味であるので、伊都は「我々の湖沼」の意味の[i-to]に由来すると考えられる。

図 2　縄文時代末期～弥生時代の糸島の想定地図
（出典： flood maps）

奴国は福岡市および春日市にあったことは誰もが認めるところである。狗邪韓国、對馬国、一大国、末廬国および伊都国は、平地に乏しい地域にあるに対し、奴国があった福岡市はやや広い平野部にある。当然、当時の平野は雑草が生えた野原であったと考えられる。野原を意味するアイヌ語は[nup]であり、これは奴の近古音の[nu]に一致する。ウイクショナリー日本語版付録のアイヌ語の発音表記によれば、[u]は日本語の「ウ」とは異なり、[u] よりも若干口の丸めて弱く発音するので、日本語話者には「オ」に聞こえることがある。一方、「奴」の上古音は[nag]、中古音は[no]である。これらのことから、「奴」はアイヌ語の[nup]（野原）に由来すると考えられる。

不彌国の比定地は、福岡県糟屋郡宇美町とする説、飯塚市とする説などがあって、まだ確定していない。不彌と類似の地名を北海道に探すと、湧別町に「富美」の地名があり、富美川が流れている。アイヌ語の[hum]は「音」の意味であり、[fum-i]は「その音」の意味である。山田秀三[5)]は、湧別町の富美川は、川口の辺で水が音をたてていた時代があったのでフミと呼ばれるようになったと推察している。一方、糟屋郡の宇美町の南部には宝満山（829.6m）と三群山（935.9m）が聳え、宝満山登山口から約 500m 登った所の宇美川源流域に、冬期の大氷柱で有名な難所ヶ滝がある。不彌は、縄文人が谷川の音に因んでこの地域を[hum-i]と呼んだことに起因すると考えられる。

邪馬台国の都があった朝倉市甘木は有明海の奥、三郡山系の麓の町である。アイヌ語で、陸地は[ya]、奥または麓の方は[mak ta]であり、これは甘木の地理条件と一致する。従って、邪馬台は縄文人が呼称した[ya-mak ta]に由来すると考えられる。なお、面土（国）は[mak ta]に由来すると考えられる。

有明海の北部は遠浅で、干満の差が大きいので、大型船は航行できない。特に、邪馬台国の時代には、現在の陸地部分が水没し、やや高い部分のみが州島となっていて、極めて浅い海であった。一方、南部にある玉名市高瀬は天然の良港で、鎌倉時代からは海外との交易で栄えたことがわかっている。このため、江南から大型船で航海してきた人々は玉名の港で小型船に乗り換えたり、或いはここから陸路で邪馬台国へ向かったと推察される。従って、投馬は、アイヌ語の[tomari]（港）に由来すると考えられる。

3　傍らの国の比定

3－1　肥前の諸国定

狗邪韓国は釜山付近、對馬国は対馬、一大国は壱岐、末廬国は佐賀県唐津市、伊都国は福岡県糸島市、奴国は福岡市および春日市にあったことが確定している。また、不彌国は、異論はあるものの、福岡県糟屋郡宇美町にあったとする説が有力である。その根拠は、国名と地名が相似すること、地名と国名の起源をアイヌ語で説明できること、その地域に弥生遺跡が集中していることである。従って、傍らの国も、この条件に合う所に存在したと考えられる。

魏の使いは、伊都国に留まり、一大率も伊都国に駐在した。伊都国があった糸島市前原から長崎方面に行くには、末廬国があった唐津市を経て背振山系の西裾を通るのが最短のルートである。現在、ＪＲ唐津線や国道は唐津市から松浦川沿いに南下するコースを通っている。恐らく、古代人もこのルートを通って伊都国と長崎方面の国を行き来していたと思われる。唐津から松浦川沿いに南下すると、多久市に達する。ここから東に向かえば佐賀市に至るが、南下すると重手遺跡、みやこ遺跡、東宮裾遺跡、釈迦寺遺跡、樺島山遺跡などの弥生遺跡がある武雄市に至る。武雄市は 1954 年に町村が合併して市制を施行するまでは杵島郡武雄町であった。武雄市の東に、佐賀平野を隔てるように犬山岳、飯盛山、白岩山、虚空蔵山など標高 300m 程度の山塊があり、その周辺が杵島郡である。縄文時代、海進のために、この山塊は島であった（図 3）。アイヌ語で本当は[si]、島は[mosiri]である。従って、『斯馬国』は杵島郡（現、武雄市付近）にあって、その語源はアイヌ語の[si-mosiri]（本当の島

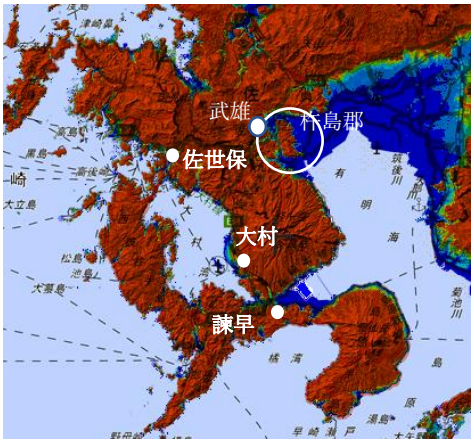


図 3　縄文海進時の西九州
（出典：国土地理院地図　縄文海進）

＝地続きではない島）に由来すると考えられる。

杵島郡の西は長崎県である。長崎県では諫早市・島原市の有明海沿岸、佐世保市、大村市に弥生遺跡が見つかっている。佐世保市は 1902 年に市制を施行するまでは東彼杵郡佐世保村で、大村市も 1924 年に市制を施行するまでは東彼杵郡大村町であった。傍らの国の 2 番目に挙げられた国は『巳百支国』である。ウィクショナリー日本語版によれば、「百」はウェード式では[pai]、[po]または[mo]であるから、巳百支はシモキと読むことができ、彼杵（ソノキ）に似ている。彼杵郡の殆どは標高が最高でも 670m 程度の山塊で占められていて、その間に集落や農地が点在する里地里山である。また、海岸線には大村湾と佐世保湾がある（図３）。アイヌ語で、大きいは[si]、入江は[moy]，里山（生活圏としての山）は[kim]であるから、巳百支（シモキ）はアイヌ語の[si-moy-kim]（大きい入江と山）に由来し、大村市～佐世保市にあったと考えられる。

長崎市の沖の東シナ海に浮かぶ五島列島にも縄文人は居住していた。縄文人は外洋を航海して交易していたのである。東シナ海から北部九州に向かうと、先ず長崎半島が視界に入り、その鞍部に諫早市がある。諫早市および島原市には弥生遺跡が見つかっているので、ここに国があったと考えられる。「いさはや」の「さ」と「は」を弱く発音すると「いさはや」であり、３番目の傍らの国の『伊邪（イヤ）国』と一致する。アイヌ語で[i]は「我々の」、[sat] は「乾いた」、[ya]は陸であるので、[i-sat-ya]は「我々の乾いた陸地」の意味である。外洋から本土へ向かった縄文人は、諫早市を含む長崎半島を「イサヤ（我々の陸地）」と呼んだと推察される。

邪馬台国の都があったと想定される朝倉市甘木の西、約 15 キロメートルの所に鳥栖市がある。鳥栖市には九州で初めて銅鐸の鋳型が出土したことで知られる安永田遺跡、柚比本村遺跡等の弥生遺跡が、隣接する基山町には千搭山遺跡等の弥生遺跡がある。古代には、基山町一帯に基肄郡が置かれていた。鳥栖も歴史が古く、大和政権時代には鳥巣と呼ばれていた。縄文時代末期～弥生時代の海面は現在よりも高く、筑後川の河口は鳥栖市の近くにあった。筑後川は氾濫を繰り返して、鳥栖市付近は湿地帯で多数の沼があったと推察される。一方、基山町は山裾にあった。アイヌ語で沼は[to]、里山は[kim]であるので、『都支（トキ）国』はアイヌ語の[to-kim]（沼と里山）に由来し、現在の鳥栖市・基山町にあったと考えられる。

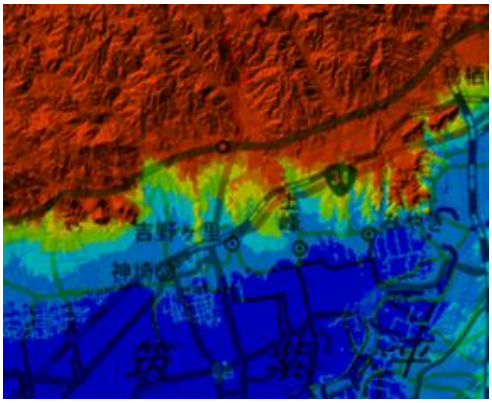


図 4 縄文海進時の佐賀県東部の海岸線
（出典：国土地理院地図　縄文海進）

表１　肥前にあった諸国

国名	読み	対応するアイヌ語		比定地
		発音	意味	
斯馬	シマ	si-mosiri	大きな（本当の）島	杵島郡（武雄市）
巳百支	シモキ	si-moy-ki	大きな入り江と里山	彼杵郡（大村市）
伊邪	イヤ	i-sat-ya	我々の乾いた大地	諫早市
都支	トキ	to-ki	湖沼と里山	鳥栖市・基山町
彌奴	ミナ	mim-nup	裂けた野原	神埼郡・三養基郡

鳥栖市の西の神崎郡、三養基郡から佐賀市にかけての一帯にも弥生遺跡が集中していて、神崎市には吉野ヶ里遺跡、三津永田遺跡、川寄吉原遺跡、川寄若宮遺跡等が、神崎郡千代田町には姉遺跡および詫田西分遺跡等が、三養基郡上峰町の二塚山遺跡および船石遺跡等が、三養基郡みやき町には原古賀三本谷遺跡、町南遺跡、本分遺跡、検見谷遺跡、北尾遺跡および姫方遺跡等が、三養基郡中原町の姫方原遺跡等がある。さらに、神埼市の西隣の佐賀市には、白石原遺跡、丸山遺跡、一本木遺跡、惣座遺跡、鍋島本村遺跡などがあり、その西隣りの小城市の弥生遺跡としては土生遺跡、久蘇遺跡等がある。これらの遺跡群の中心はみやき町（旧三根町）であり、『三根（みね)』は『彌奴（みな)』に酷似するので、『彌奴国』は神崎市・三養基郡・佐賀市・小城市の一帯の佐賀平野にあったと考えられる。図 4 は国土地理院による縄文海進時の吉野ヶ里遺跡等が存在する佐賀県東部の地図である。当時は、佐賀平野は海が大きく入り込み、嘉瀬川は深い河谷となって、東に開口していた[6)]。アイヌ語で「裂く」は[mim]、「野原」は[nup]であるので、彌奴は「裂けた野原」の意味のアイヌ語の[mim-nup]に由来すると考えられる。

以上のことを表 1 にまとめる。

3－2　肥後・豊後の諸国

熊本県の弥生遺跡は菊池川流域、白川と緑川の流域、球磨川の流域に集中している。前述したように、菊池川の下流域の玉名市を中心とする広大な地域に投馬国があったと考えられる。

九州説の研究者の間では、熊本県菊池市付近にあったとする見解が広く受け入れられている。その根拠は、狗奴と熊、および官名の狗古智卑狗（クコチヒク）と菊池が似ていることにある。しかし、古代の菊池郡周辺に「くま」と呼ばれる地名を見出すことはできない。菊池郡の「隈」が文献に登場するのは南北朝時代になってからであり、菊池氏が本城を築き、その城と城下町を隈部と呼んだことに始まる。古代から存在した「クマ」の地名は、熊本県南部の球磨であり、この球磨地方は熊曽の国にあったと考えられる。従って、狗奴国は菊池市付近にはなかった可能性が高い。

菊池市・菊池郡域は菊鹿盆地と呼ばれ、9 万年前から弥生時代まで茂賀の浦と呼ばれる弓形の湖があった。アイヌ語で、弓は[ku]、凹地・跡は[kot]であるので、「弓状の凹地」は[ku-kot]である。菊池は平安時代まで久々知（ククチ）と呼ばれていたが、これはアイヌ語の[ku-

kot]に由来すると考えられる。また、『好古都』は「コクツ」と読める。従って、『好古都国』は旧菊池郡（山鹿市・菊池市・菊池郡）にあったと考えられる。

緑川下流域の宇土市にも弥生遺跡が集中している。宇土の古名は浮土（フト）であるので、この地は湿地であったと推察される。アイヌ語では「浮き上がる」「はねる」は[pus]と、「〜ない」は[ko]であるので、湿地は[pus-ko]（浮き上がらない・はねない）であり、これは『不呼』に酷似する。従って、不呼国は宇土市付近にあったと考えられる。

球磨川の下流域の八代市にも弥生遺跡が集中している。八代は不知火（海上に現われる怪し火）で有名である。日本書紀の景行天皇紀には、葦北を船出した天皇は日が暮れて岸に着くことが難しかったが、火（不知火）に導かれて無事に八代県の豊村に着いたとの説話がある。つまり、沖の不知火に対して、八代県は本当の陸地であった。アイヌ語で「本当に」は[si]、「陸」は[ya]、「野原」をは[nup]であるので、不知火はアイヌ語の[si-ya-nup]（本当の陸上の野原）に由来すると考えられる。[si-ya-nup]は『姐奴（シャナ）』にも酷似するので、姐奴国は八代市付近にあったと考えられる。

次の傍らの国は『對蘇国』である。前述したように、『對』は２つを意味するアイヌ語の[tu]であり、蘇は石が多いという意味の[so]であるから、[tu-so]は「ソ」が２つあるという意味である。火山の麓は典型的な「ソ」であり、肥後にはカルデラとして有名な阿蘇山がある。阿蘇山のカルデラ盆地は中央火口丘によって南北に二分されているので、阿蘇山には北と南に二つの「ソ」がある。阿蘇市には弥生遺跡が集中しているので、阿蘇市付近が對蘇（ツソ）国の中心地であったと考えられる。

阿蘇市から東に進み外輪山を抜けると、九重山の麓に広がる竹田盆地であり、ここも「ソ」である。竹田市と豊後大野市には弥生遺跡が集中している。従って、『蘇奴国』は竹田市・豊後大野市の一帯にあって、その名はアイヌ語の[so-nup]（石がゴロゴロした野原）に由来すると考えられる。

以上のことを表２にまとめる。蘇奴国は豊後の竹田市および豊後大野市にあったと考えられるが、この論文では便宜上、肥後の諸国として取り扱う。

表２　肥後にあった諸国

国名	読み	対応するアイヌ語		比定地
		発音	意味	
好古都	コクツ	ku-kot	弓状の凹地	菊池市・山鹿市
不呼	フコ	pus-ko	湿地（浮き上がらない土地）	宇土市
姐奴	シャナ	si-ya-nup	本当の陸上の野原	八代市
對蘇	ツソ	tu-so	石が多い蘇が二カ所ある	阿蘇市
蘇奴	ソナ	so-nup	石が多い野原	竹田・豊後大野

３−３　熊曽の国の諸国

宮崎県の弥生遺跡は県中央部の小丸川流域の高鍋町、一ツ瀬川流域の新富町および大淀川流域の宮崎市と、県南部の都城市付近に集中している。西都原古墳群で有名な西都市は市町村が合併して市制となったが、その中心地は児湯郡妻町であった。児湯郡は宮崎平野の北端に位置し、平野の南端の宮崎市にも弥生遺跡が多数見つかっている。『呼邑』は『こゆう』と読める。アイヌ語では[ko]は「~に対して、~に向かって」の意味であり、[yu]は「湯、温泉、冷泉」の意味であるので、[ko-yu]は「向かいに冷泉がある」の意味である。西都市の中心街から南に約５km の鹿野田（旧児湯郡都於郡邑村）に、高屋温泉と鹿野田神社の塩井戸と呼ばれる冷泉が存在する。高屋温泉は戦国時代に日向割拠した伊東市の居城であった都於郡城址丘陵の谷間にあり、都於郡城で生まれた天正遣欧少年使節の伊東マンショは、この鉱泉の水を飲んでいたといわれる。また、傷を負った鹿がこの鉱泉で癒したとの伝説がある。鹿野田神社は、以前は潮妙現大明神と呼ばれ、境内にある塩井戸の水は干潮によって上下するといわれる。図５は flood maps（http://flood.firetree.net/）を用いて作成した現在よりも海面が 2m高かった縄文時代末期～弥生時代の一ツ瀬川流域の想定地図である。海が西都市まで入り込み、都於郡城址丘陵は児湯郡から海で隔てられていた。当に、児湯郡新富町および西都市（旧児湯郡妻町）の向いに鉱泉があったのである。これらのことから、呼邑国は児湯郡にあったと考えられる。

図５　縄文時代末期の一ツ瀬川流域の想定地図
（出典：Flood maps）

「アイヌ語地名」の項で示したように、都城市・曽於市～人吉は熊曾国であった。『華』の上古音は[xua]であるので、「華奴」は「球磨」に、「蘇奴」は「囎淤」に似ている。従って、華奴蘇奴国は後の熊曾国であり、都城・曽於から人吉の範囲にあったと考えられる。

鹿児島県の弥生遺跡は、薩摩半島の南西部、鹿児島市周辺、大隅半島の鹿屋市周辺に集中している。薩摩半島は平野に乏しく、低い山地で占められている。生活圏としての山（里山）はアイヌ語では[kim]（キㇺ）である。また、薩摩半島には、市来、入来、串木野、日置、樋脇、喜入、高城、水引など、『き』が付く地名が多い。弥生遺跡は、日置市、日置郡松元町、日置郡金峰町（現、みなみ薩摩市）に集中して存在する。これらのことから、『鬼国』は薩摩半島にあり、その中心地は日置市・日置郡一帯にあったと考えられる。

鹿児島県の薩摩半島と大隅半島に挟まれた錦江湾の地形は、湾奥部の姶良カルデラ、湾中央部の阿多北カルデラ、湾口部の阿多南カルデラで構成されている。霧島連山は姶良カルデラの外輪山であり、霧島山から下った錦江湾岸に姶良市（旧、姶良町）がある。姶良市と南接する鹿児島市に弥生遺跡がみとめられる。姶良（元は姶良）は、『為吾（イラ）』に酷似す

る。アイヌ語で[i]は「我々の」、[ra]は「下の方、低い所」の意味であるので、[i-ra]は姶良市・鹿児島市の地理的条件（霧島山の下の方の海とすれすれの所）に合っている。これらのことから、『為吾国』は姶良市・鹿児島市付近にあったと考えられる。

大隅半島の鹿屋市、鹿屋市の東隣の肝属郡串良町、南隣の肝属郡大根占町にも弥生遺跡が分布している。鹿屋市は、元は肝属（キモツキ）郡鹿屋町であった。肝属平野の周辺には、笠野原台地をはじめとするシラス台地が広く分布し，低地は大部分がシラス台地の急崖によって囲まれていて、後背湿地と堤間湿地には泥炭層が広く堆積している。湿原や泥炭地はアイヌ語では[ki-nup]であるが、これは日本語話者には「きの」と聞こえる「きの」は「きも」に似ているので、『鬼奴（キナ）国』は鹿屋市（肝属郡）にあったと考えられる。

以上のことを表３にまとめる。

表３　熊曽国にあった諸国

国名	読み	対応するアイヌ語		比定地
		発音	意味	
呼邑	コユ	ko-yu	向いに鉱泉がある	児湯郡
華奴蘇奴	クナソナ	kuna-so-na	クマ（物干し竿）と石が多い野	都城市・人吉市
鬼	キ	ki	里山	南薩摩市
為吾	イラ	tu-so	山の下の海とすれすれの所	姶良市・鹿児島市
鬼奴	キノ	so-nup	湿原および泥炭地	肝属郡（鹿屋市）

３－４　豊前・豊後・筑豊・宗像の諸国

大分県の弥生遺跡は、竹田市および豊後大野市一帯、日田市周辺、大分市周辺、および中津市・宇佐市・国東半島の一帯に集中している。前記したように、竹田市付近には『蘇奴国』あったと考えられる。豊後風土記には、大分の地名は、景行天皇がこの地を訪れた際に、「広大なる哉、この郡はよろしく碩田国と名づくべし」と言って名付けられとある。この伝承の信憑性は別として、邪馬台国の時代には、この地の名前は大分ではなかった。大分市の北に隣接する別府市は、元は速見郡別府町であったので、大分市付近も速見と呼ばれていたと思われる。『（は）やみ』は『やま』に類似する。図６は国土地理院が web 上に公開している縄文海進時の日本地図から大分市付近を抜き出したものである。当時は、海が陸地に入り込み、大分市付近は海の底であり、大分川流域と大野川流域は入江になっていた。アイヌ語では陸は[ya]、入江は[ma]であるので、[ya-ma]は「海が陸に入り込んだ所」の意味である。従って、『邪馬国』は大分市付近にあって、その名はアイヌ語の[ya-ma]に由来すると考えられる。

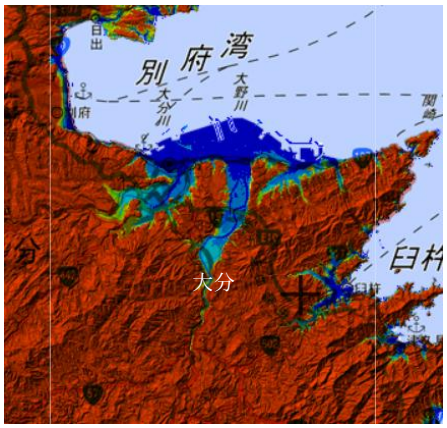


図６　縄文海進時の大分市付近の大分市付近
（出典：国土地理院地図　縄文海進）

日田市は、市制を施行するまでは玖珠郡日田町であった。日田市は九州の中心に位置し、ここから別府・大分市方面へ、阿蘇・九重方面へ、耶馬溪・中津方面へ、筑豊方面へ、久留米方面へ、朝倉・福岡方面へと国道が通っている。つまり、各方面へ行き来する人々がここを通っていたのである。従って、玖珠はアイヌ語の[kus](通る)に由来すると考えられる。『躬臣』は『くし』と読むことができて、『くす』と似ているので、『躬臣国』は日田市付近にあったと考えられる。

邪馬台国の都があった朝倉市の北、三郡山系の山地を越えると、筑豊地方である。この筑豊地方には、飯塚市、嘉麻市、嘉穂郡桂川町、田川市等に弥生遺跡が分布している。桂川町の土師区から嘉麻市にかけて広がる丘陵地帯は玄武岩製石斧が集中的に出土する遺跡集中区域である。土師は古くから続く地名であり、和名類聚抄に穂波郡土師郷が記載されている。アイヌ語に、柴（山野に生じる小さな雑木やその小枝）を意味する[has]（ハシ）という単語がある。恐らく、古代の土師郷は小さな雑木に覆われていたために、”ハシ”と呼ばれていたと推察される。『巴利』は「はり」と読め、「はじ」に似ていることから、『巴利国』は土師郷を中心とする筑豊地方にあったと考えられる。

豊前地方には、行橋市付近および北九州市に弥生遺跡が集中している。和名類聚抄によると、仲津郡に城井郷があった。現在も、行橋市に隣接する築上町に城井の地名が残っており、戦国時代には宇都宮氏がこの地に城を築いたことが知られている。『支惟』の読みは『きい』であり『城井』と一致するので、『支惟国』は行橋市・築上郡から北九州市にかけての一帯にあったと考えられる。アイヌ語では[ki]は萱、接尾の[i]は「～所」であるから、[ki-i]は「萱が生えた所」の意味である。『支惟』があった地域は、萱が生い茂っていたと推察される。

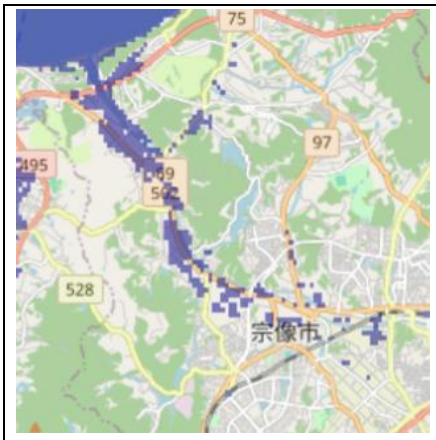


図７　縄文時代末期～弥生時代の宗像付近の想定地図
（出典：Flood maps http://flood.firetree.net/）

宗像市には、今川遺跡、大井三倉遺跡、田熊石畑遺跡、東郷高塚遺跡、久原遺跡等、多数の弥生遺跡があり、古墳時代の遺跡も多い。縄文時代、宗像地域でも海が陸に入り込んで細長い入江になっていた(図 7)。縄文海進が始まった頃、宗像地域では古砂丘が海進の途中ほとんど無傷のまま維持されたため、古砂丘の背後および上流側には、淡水湖が発達した[5)]。つまり、川がふさがれて湖になり、その周囲は野原[nup]であったと考えられる。「詰まる、ふさがる」のアイヌ語では[mu]であるので、宗像の「ムナ」は、アイヌ語の[mu-nup]（ふさがれた野原）に由来すると考えられる。「宗」は「烏奴」に酷似するので、烏奴国は宗像市付近にあったと考えられる。

以上のことを表４にまとめる。

表４　豊国・宗像にあった諸国

国名	読み	対応するアイヌ語		比定地
		発音	意味	
邪馬	ヤマ	ya-ma	海が陸に入り込んだ所	速見郡（大分市）
躬臣	クシ	kus	人が行き来する所	玖珠郡（日田市）
巴利	ハリ	has	雑木に覆われている所	筑豊（土師郷）
支惟	キイ	ki-i	萱が生えた所	京都郡（行橋市）
烏奴	ウナ	mu-nup	川が塞がれてできた野原	宗像市

3－5　狗奴国

倭人伝には、「南に邪馬台国の女王が住む所に至るには水行十日陸行一月」との記述の後に、傍らの国として 21 国が列挙されている。その 20 番目に烏奴国が挙げられた後、「次に奴国あり。女王の境界の尽きるところ」記され、さらに「其の南に狗奴国あり」と書かれている。従って、本来ならば、其は奴国を指し、狗奴国は奴国の南にあると解釈される。しかし、奴国の南には邪馬台国があるので、この解釈は理屈に合わない。そこで、傍らの国を全て無視し、其は邪馬台国であるとして、邪馬台国の南に狗奴国があったと解釈されている。

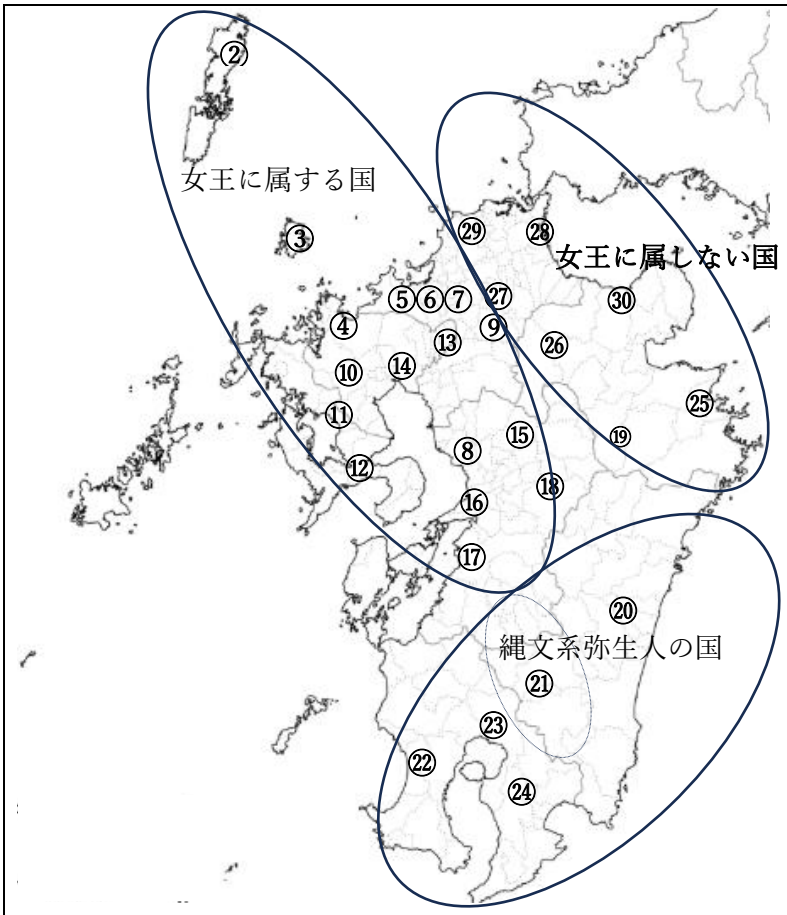
しかし、其は邪馬台国であるするのは無理があるように思われる。筆者は、魏志倭人伝は 30 カ国が使者を通わせているとしながら、記載されて国の合計は 31 カ国であることに着目する。これは、最後に登場する奴国は、邪馬台国への行程の途中にあった奴国の重複であるためと考えられる。つまり、傍らの国の最後の国の烏奴国は奴国と接していたと考えられる。従って、其は烏奴国を指し、狗奴国は烏奴国の南にあったと考えられる。上述したように、烏奴国は福岡県宗像市付近に比定される。倭人伝では方角が反時計回りに 45 度ずれているので、南は実は南東である。宗像の南東は大分県であるので、狗奴国は大分県にあったことになる。

邪馬台国の会の考古学データベースによると、弥生時代の鉄鏃の出土数は福岡県が 1 位（394 個）、２位が熊本県（339 個）、３位が大分県（241 個）、４位が京都符（112 個）、５位が岡山県（104 個）である。このことは、大分県にも強大な国があったことを示す。大分県宇佐市付近には、安心院遺跡、京徳遺跡、宮ノ原遺跡、別府遺跡、川部遺跡、東上田遺跡等、弥生時代から古墳時代の遺跡が多数あり、古くから邪馬台国の候補地に挙げられている。宇佐市の北には中津平野が拡がり、中津市にも諫山遺跡や上の原遺跡がある。宇佐市の東の国東半島にも、安国寺遺跡等の弥生遺跡がある。従って、狗奴国は、宇佐市付近（中津、宇佐、国東半島）を領土としていたと考えられる。宇佐市、中津市、豊前市を含む中津平野は山裾が弓状の曲線を描いていて、海岸線は弓に張った弦のように直線状である。アイヌ語で、弓は[ku]は弓、野原は[nup]であるので、狗奴はアイヌ語の[ku-nup]（弓状の野原）に由来すると考えられる。

筆者は前に報告した倭国の創生期[7)]において、九州西部（筑紫・肥）には倭族と倭人族が居住していたが、九州東北部（宗像・筑豊・豊前）には倭族のみが居住し、南九州には縄文

系弥生人が居住していたことを示した。これら三地域には墓制に隔たりがあり、倭人が居住した西部では甕棺墓制が発達したが、東北部では石棺墓や木棺墓が用いられた。また、南九州では、「板石積石棺墓」・「立石土壙墓」・「土壙墓」などの地下式墓制が営まれていた。宗教においては、西部では中期までは銅剣・銅矛祭祀が行われていたが、後期になると銅鏡が祭祀に用いられるようになった。一方、東北部では、後期になっても銅剣祭祀・銅矛祭祀が行われた。さらに、九州南部では青銅器は用いられなかった。このように、九州は西武、東北部、および南部には異なる人びとが居住し、異なる文化を営んでいたのである。

弥生時代後期になると、西部では統一に向けた争いが起こり、邪馬台国はこの争いに勝利して西部の覇者になった。九州西部で統一に向けた争いが起こっていることに、東北部の倭族が無関心であったとは考えられない。恐らく、東北部でも、西部からの侵略に備えて統一の動きが生まれ、狗奴国が覇権を握ったと推察される。こうして、邪馬台国連合と狗奴国連合（女王に属しない国）が対峙することになったと考えられる（図 8)。筑紫と筑豊の間は三郡山地で遮られているが、その山地の北端の海岸線に烏奴国があった宗像市があった。その南の福津市までが旧宗像郡であり、その南は古賀市（旧糟屋郡古賀町）である。古賀市は甕棺出土の北限である。古賀市までが奴国の領域であったとすれば、烏奴国は当に女王の境界が尽きるところであった。



①狗邪韓国（図には非表示）②對馬国　③一大国　④末盧国　⑤伊都国　⑥奴国⑦不彌国　⑧投馬国　⑨邪馬台国　⑩瓦馬国　⑪巳百支国　⑫伊邪国　⑬都支国　⑭彌奴国　⑮好古都国　⑯不呼国　⑰姐奴国　⑱対蘇国　⑲蘇奴国　⑳呼邑国　㉑華奴蘇奴国　㉒鬼国　㉓為吾国　㉔鬼奴国　㉕邪馬国　㉖躬臣国　㉗把利国　㉘支維国　㉙烏奴国　㉚狗奴国

図８　倭の 30 国
（原図の出典は白地図専門店）

4　邪馬台国と狗奴国の戦争

倭国の大乱に勝利して西九州を支配するようになった邪馬台国は、さらに九州東北部を支配することを目指して、狗奴国が支配する筑豊地方を侵略し始めたと考えられる。しかし、狗奴国は強国で、邪馬台国は苦戦していた。冊封制度では、朝貢国は攻撃をうけた場合に宗主国に支援を求めることができた。このため、卑弥呼は 243 年に魏に朝貢して軍事支援を求め、魏の皇帝は要請に応じて 245 年に帯方郡の太守を通して難升米に黄幢を授与した。黄幢は「黄色の垂れ旗」であって、魏の皇帝の権威の象徴、謂わば『錦の御旗』である。と

ころが、帯方郡の太守の弓遵は韓の反乱にあって戦死したため、黄幢は卑弥呼には届かず、帯方郡に置かれたままになった。この間に戦況は悪化して、247 年に次の太守の王頎が着任すると、卑弥呼は直ちに支援の要請をした。邪馬台国の都に比定される朝倉市甘木の平塚山の上遺跡では意図的に建物を燃やした跡が検出されており[8]、この遺構は狗奴国軍による焼き討ちによるものと考えられる。邪馬台国が切迫した状況に陥っていることを知った王頎は、直ちに国境守備隊の張政らに詔書と黄幢を持たせて倭国に派遣した。

魏志倭人伝はそのことを記述した後、「卑弥呼以死」と、卑弥呼が死んだことに簡単に言及している。多くの研究者は、『以』を『既に』の意味と捉え、「張政らが到着した時には既に卑弥呼は老衰で死んでいた」と解釈している。一方、卑弥呼は戦争に負けたので責任を問われて殺されたとする説もある。松本清張氏は、「卑弥呼以死」の前に「詔書黄幢假難升米爲檄告諭之」との記述にあることに注目し、「張政が檄をつくって難升米に告げ諭した結果、卑弥呼は死亡した」と解釈した[9]。つまり、松本氏は、「卑弥呼は戦争に負けた責任をとらされて、張政の命令で殺された」と考えたのである。しかし、卑弥呼は魏の皇帝によって承認された倭王であるので、下級役人に過ぎない張政が自分の一存で卑弥呼を殺す権限を持っていたとは考え難い。また、『以』を『～なので』の意味の接続詞として用いる場合には、「外出回来洗手漱口　以防感冒」のように、前節と後節の間に『以』を置くのが一般的である。松本清張氏が主張するような内容であれば、「爲檄告諭之　以卑弥呼死」が正しい表記であると考えられる。従って、「卑弥呼は戦争に負けた責任をとらされて、張政の命令で殺された」とする説には無理があるように思われる。

中国の史書を読む場合には、『春秋の筆法』とよばれる書き方に留意しなければならない。故事成語を知る辞典には、春秋の筆法とは、「記録に残すことの意味を充分に考えて、公正な態度で事実を記録すること。転じて、間接的な原因にも重要な意味を認めて、あたかも直説的な原因であるかのように記述すること。」、その由来は、「史記―孔子世家に述べられている、孔子が歴史書の春秋を編纂したときの態度から、筆すべきは即ち筆し、削るべきは即ち削る（記録すべき事実はきちんと記録し、記録すべきでない事実は記録しない）」とある。問題の「卑弥呼以死　大作冢」には、卑弥呼が死んだ直接の原因も、間接的な原因も書かれていない。台湾の謝銘仁教授も、「卑弥呼以死　大作冢」は、卑弥呼が死んだので大々的に墓を作ったとの意味であると述べている[10]。卑弥呼の死因は何であったのか。中国では身分によって死を意味する字が異なり、皇帝には『崩』、諸侯には『薨』、太夫（小領主）には『卒』、士には『不禄』、庶民には『死』が用いられる。卑弥呼は魏の皇帝から『親魏倭王』に任じられているので、その死には『薨』を用いるのが当然であろう。それにも関わらず『死』が用いられていることは、陳寿が『春秋の筆法』を用いて卑弥呼の死を批判していることを示唆する。森浩一氏は、『以死』の用例は『史記』に 38 例、『三国志』に 33 例、『新唐書』に 56 例など二十五史に 761 例あるが、自然史はなく、刑死や賜死（シシ）・諫死（カンシ）・戦死・自死・遭難・殉死・奔命（ホンメイ）・事故死などの非業の死ばかりであったと述べている[11]。従って、卑弥呼は自然死ではなかったことは明らかである。そして、卑弥呼が不

慮の死を遂げるに至った間接的な原因は魏の援軍が遅れたことにあると、陳寿は批判的に述べているものと考えられる。

邪馬台国は狗奴国に都を占領された上に王を殺害され、苦戦していたに違いない。このため、張政は『檄を作って邪馬台国の人たちを告喩』したと考えられる。ブリタニカ国際大百科事典には、檄とは、「中国、古代に、告諭、召集、詰責などに用いた公文書。または、その文章様式。もともと、戦いのときにおこったもので、天の時、地の利、人の和から説き起こして、味方を激励したり、敵に降伏をすすめたりする内容のものが多く、激しい表現をとる。」と書かれている。また、デジタル大事泉によると、檄は、「１．古代中国で、召集または告諭の文書。木札を用いたという。めしぶみ。さとしぶみ。２．自分の考えや主張を述べて大衆に行動を促す文書。檄文。ふれ文。」である。また、日本大百科全書には、檄は、「（２）喩し文・触れ文。軍事のみならず、広く先方の悪を攻撃し、当方の善を称揚し、ともに立ち上がろうと人々に呼びかける文書で、『檄を飛ばす』などというのはこの例であるが、いずれも、激烈な言辞と文体を用いる点に特色がある。」と書かれている。張政の率いる国境守備隊は、謂わば、軍事顧問団であるので、戦場の近くまで来て、張政は、難升米に詔書と黄幢を授与し、檄を書いて邪馬台国の民衆を諭したのである。当時、殆どの人々は漢字を読めなかったと思われるので、檄がどの程度、邪馬台国軍の志気を高めるのに役だったかは分からない。しかし、黄幢を掲げた魏の軍隊は少数ではあったとしても、倭人が見たこともない武具を身につけるものであったであろうし、強力であったであろう。魏軍の存在は邪馬台国軍を勇気づけ、狗奴国軍に脅威を抱かせたことであろう。形勢は一挙に逆転し、狗奴国軍は敗走したと推察される。

倭人伝は、男王に代えて卑弥呼の血縁者の台与を女王に立てることによって国は治まったと伝える。国が治まると、台与は掖邪狗らに張政らを送って行かせ、掖邪狗らはそのまま魏の都に行って朝貢した。倭人伝に、それが何年のことであったかは記述されていない。中国では、249 年に司馬懿がクーデターを起こして権力を掌握し、皇帝の曹芳を傀儡とした。この事件以降、実質上の権力は魏から晋に移っていて、晋書の本紀には実質上の始祖である司馬懿から記載されている。司馬懿は 251 年に死去し、後を継いだ司馬師も 255 年に死去したので、弟の司馬昭が権力を引き継いだ。司馬昭は魏の最後の皇帝陳留王奐の景元 4 年（263 年）11 月に相国になり、文咸熙 2 年（265 年）8 月に死去した。長男の司馬炎が晋王と相国の地位を引き継ぎ、4 ヶ月後の 12 月に年号を泰始と改め、魏から晋への禅譲の儀式が行われた。晋書倭国伝に倭国が登場するのは文帝（司馬昭）の時で、文帝が相になってから倭人が数度やってきたと記述されている。司馬昭が相国であった期間は、263 年 11 月から 265 年 8 月の間であり、この間に、倭の使いが複数回、魏に朝見したことになる。泰始元年（265 年）には倭の使者が晋の武帝（司馬炎）に朝見したとの記述があるので、台与の使者が魏へ朝見したのは 263 年であったと考えられる。従って、張政らが倭国から引き上げたのは 262 年であることになる。

4　まとめ

古事記と魏志倭人伝に記され国名は、アイヌ語（縄文語）地名であると考えられた。著者は弥生遺跡が集積していること、国名と地名に類似性があること、国名がアイヌ語地名であることを条件に傍らの国の位置を検討し、斯馬国を武雄市に、巳百支国を長崎県東彼杵郡に、伊邪国を諫早市に、都支国を鳥栖市・基山町に、彌奴国を神埼市・佐賀市に、好古都国を菊池市・山鹿市に、不呼国を宇土市に、姐奴国を八代市に、對蘇国を阿蘇市に、蘇奴国を竹田市・豊後大野市に、呼邑国を宮崎県児湯郡に、華奴蘇奴国を都城市・人吉市に、鬼国を鹿児島県日置市に、為吾国を鹿児島市・姶良市に、鬼奴国を鹿屋市に、邪馬国を大分市に、躬臣国を日田市に、把利国を福岡県桂川町に、支維国を行橋市・北九州市に、烏奴国を宗像市に、狗奴国を宇佐市に比定した。

邪馬台国は倭国の大乱に勝利して九州西部（筑紫国と肥国）を統一したが、東北部と南部は邪馬台国には属していなかったと考えられた。邪馬台国は九州の統一を目指したが、九州東北部を統一した狗奴国との戦いで劣勢であった。このために、243 年、卑弥呼は魏に軍事支援を願い出、魏の皇帝は要請に応じて 245 年に帯方郡の太守を通して難升米に黄幢を授与した。ところが、帯方郡の太守の弓遵は韓の反乱にあって戦死したため、黄幢は卑弥呼には届かず、帯方郡に置かれたままになった。247 年に次の太守の王頎が着任すると、卑弥呼は直ちに支援の要請をした。邪馬台国が切迫した状況に陥っていることを知った王頎は、直ちに国境守備隊の張政らに詔書と黄幢を持たせて倭国に派遣した。しかし、支援が遅れたために、卑弥呼は狗奴国軍によって殺されてしまった。

張政が檄を作って邪馬台国の人たちを鼓舞し、卑弥呼の縁続きの台与を女王にしたことによって戦況は改善した。戦争が終結すると、台与は掖邪狗らに張政らを送って行かせ、掖邪狗らはそのまま魏の都に行って朝貢した。魏志倭人伝には、これが何年の出来事であるか記されていない。しかし、晋書東夷伝倭人の条（晋書倭人伝）の記述から、262 年に戦争が終結し、台与の使者が魏へ朝見したのは 263 年であったと考えられた。

参考文献

1）大川直士　邪馬台国の実像　古代史ネット　（2024）
2）崎谷満　DNA でたどる日本人 10 万年の旅　昭和堂（2008）
3）大友幸男　日本縦断アイヌ語地名散歩　三一書房（1995）
4）中橋孝博　日本人の起源　古人骨からルーツを探る　講談社（2005）
5）山田秀三　北海道の地名　アイヌ語地名の研究　草風館（2000）
6）下山正一　北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向　第四期研究 33（1994）
7）大川直士　倭国の創生期　古代史ネット（2024）
8）甘木市教育委員会　平塚山の上遺跡（2006）
9）松本清張　清張通史（1）　講談社（1976）

10）謝銘仁　邪馬台国・中国人はこう読む　立風書房（1990）
11）森浩一　倭人伝を読みなおす　ちくま書房（2010）